

特集

3

商・材・研・究

ビデオ会議システム

企業向けトリプルプレイで注目 安心のサポート体制が普及の鍵

ビデオ会議システムはここ数年伸び悩んでいる。台数で年1万～1万2000台で推移している。企業向けトリプルプレイを視野に入れるNI/SIが増えるなか、有力商材の地位を獲得するには、会議室でのビデオ会議という概念を覆す必要がある。

ブロードバンドインフラの普及に伴い、ビデオ会議システムはIP化が進み、それまで困難だった高画質・高音質を実現できるようになった。だが、2005年度の国内市場規模は台数ベースで約1万2000台に過ぎず、最近3年間でも10%程度しか伸びていない。

最大の要因はイニシャルコストだ。日本企業は何を導入する時にもイニシャルコストに目を奪われがちで、ラ

ンニングコストを含めたコスト効果まで考えて導入に踏み切るケースは少ない。このため機器の単価が高く、MCU(多地点接続装置)まで含めると数百万円もかかるとなると、二の足を踏んでしまうユーザー企業が非常に多い。

「Web会議」と呼ばれるPCソフトの普及も、ビデオ会議市場が伸びない大きな要因だろう。

従来、ビデオ会議システムの導入

目的の大半は「社内出張費の削減」と「移動時間の削減」だった。だが、ブロードバンドの普及につれ、日常業務の打ち合わせをリモートで行い、「社員同士のコミュニケーションを強化したい」というニーズが高まってきた。

ブロードバンド回線さえあれば安価で導入でき、自席や外出先からでも手軽に会議に参加できるソフトウェア製品はこうしたニーズに合致していたのだ。このため、役員向けにはビデオ会議システムを導入しても、社員同士のコミュニケーション用にはソフトウェア製品を採用する企業が少なくない。

こうした市場の変化に、メーカー各社はただ手をこまぬいていたわけではない。では、各社はどのような取り組みを実施しているのだろうか。ポ



ポリコム「VSX 7000s」。同社のフラッグシップモデル「VSX 7000」の機能を拡張した。中規模会議室向けで、内蔵スピーカーとサブウーファーにより高性能な音声を提供。最新のビデオ会議向けの技術と規格を採用し、自然な映像を実現している。また、標準でデュアルモニターに対応しているため、ビデオと同時にPCデータや外部ビデオ映像などの共有が可能

リコム、タンバーク、ソニーと、05年に国内に本格参入したアエスラの世界4大メーカーの戦略を見ていくことにしよう。

ロケーションフリーを実現

まず、03年6月に、ソニーがカメラと本体を分離して設置できる小型・軽量の「PCS-1」を発売。それまでの大会議室用の大規模システムというイメージを覆した。

04年には個人のデスクでも利用できるよう、カメラや液晶モニターを一体化したオールインワンタイプの製品が登場。ポリコムは「Polycom VSX 3000」、タンバークは「TANDBERG 1000」を相次いで市場投入した。

ビデオ会議システムはこのように、専ら会議室で利用されるものから、ロケーションフリーの製品へと発展してきた。

高画質・高音質を追求

だが、それだけでは市場が飛躍的に拡大しないことは、前述の直近のデータからも明らかだ。

もう一つ各社が口を揃えるのは、「高画質・高音質」へのこだわりだ。

この点はソフトウェア製品との大きな差別化ポイントになっている。

ポリコムジャパンの奥田智巳社長は、「当社の命は音の良さと、音質には妥協していない」と言い切る。同社のオーディオテクノロジー「Polycom Siren 14」は、ITU(国際電気通信連合)で国際標準規格「G.722.1 Annex C」として認定されている。

人間の肉声は女性が約150Hz～10kHz、男性が約100Hz～8kHzと言われている。これに対してSiren 14は、80Hz～14kHzをカバーしているため、非常にクリアな音質でビデオ会議を実施できる。

映像では、より少ない帯域幅で高画質を実現している点が特徴。すべてのユーザーが光ファイバーインフラを利用しているわけではない現状では、大きなセールスポイントになっている。

タンバークもオーディオ機器メーカーからスタートした背景があり、音質には定評がある。日本支社の楠本博茂社長は「20kHzというCDレベルのハイクオリティを実現している」と語る。また、個々のマイクにエコーキャン

セラーを搭載。人間の肉声に近い音だけを拾ってエコーキャンセラーをかけることで、よりリアルな音声通話を実現している。

ソニーはハイエンドモデル「PCS-G70S」とスタンダードモデル「PCS-G50」に、従来比約4倍の解像度を持つ4CIFビデオフォーマットを採用した。また、ソニーマーケティング・プロフェッショナルビジネスマーケティング部BSプロダクツMK課の中村隆昭マーケティングマネージャーは「最大伝送レートを従来の2Mbpsから4Mbpsに向上させた」と説明。映像と音声をスムーズに送受信でき、快適なビデオ会議環境を実現した。

アエスラの特徴は、ネットワークに強い点だ。世界中のキャリアにISDNやxDSL等のネットワーク機器を提供してきたことから、スキルも豊富で、ノイズリダクションやエコーキャンセラー機能を高いレベルで仕上げている。

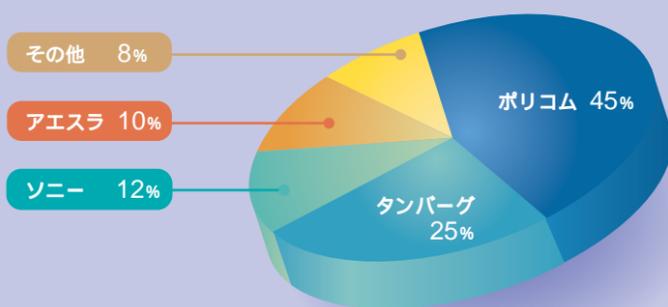
使い勝手を重視したデザイン

高画質・高音質でソフトウェア製品との差別化を図っている各社だが、競合ハードウェアメーカーとの差別化を打ち出すことも重要だ。大別すると、製品そのものに付加価値



タンバークの「TANDBERG 150MXP」。個人のデスクトップ向けながら、ビジネスクオリティを保持。内蔵暗号化機能により高信頼性の通話を実現している。カメラとモニターを人間工学の視点から最適な位置に設定したため、使い勝手がよい。また、費用対効果が高い点もセールスポイント

図 ビデオ会議システムの世界シェア



(本誌推定)